

『続狂言記』をアレンジした幕末台本の表現性 —その実態と狙い—

小林 千草

一 はじめに

『続狂言記』は元禄十三年（一七〇〇）刊である。一六六〇年刊『狂言記』につき、『狂言記外五十番』とは同時期の刊行であり、江戸出版文化のなかで読み物としても人気のあったことがしのばれる。狂言記シリーズに所収される狂言台本を提供した“人たち”については、三流¹⁾に属さない町方の狂言役者集団などが想定されているが、本稿では、幕末期写本と推定される成城大学図書館蔵〈遠山〉本「瓜ぬす人」が、『続狂言記』所収の「瓜盗人」に多くを依拠している実態を語彙・表現の相異も視野に入れつつ報告し、なぜそのような写本を新たに作成する必要があったかなどについても考察する。

二 成城大学図書館蔵『狂言集』2群とは

成城大学図書館蔵『狂言集』一四冊のうち、1群六冊は大蔵流台本であり（小林千草6参照）、3群三冊は鷺流台本である（小林千草7参照）。2群五冊の資料的性格はきわめて複雑で、以下のような状況にある。

- (一) 成城〈甲〉本……薩摩守・木六駄・とちはくれ など、一〇曲を所収。指定辞「ぜあ」²⁾を全曲使用。小林千草1・4・5など参照。

- (二) 成城〈乙〉本……地蔵舞・鏡男・岩橋など、一曲を所収。一部の曲が指定辞「ぜあ」を使用。小林千草2・3・4など参照。

- (三) 成城〈丙〉本……文山賊・魚説法・引くゝり など、八曲を所収。一部の曲が指定辞「ぜあ」を使用。小林千草3参照。

- (四) 成城〈丁〉本……蟹山伏・清水・呂れん など、一六曲を所収。指定辞「ぜあ」を使用せず。小林千草3参照。

- (五) 成城〈遠山〉本……不聞座頭・宝の槌・瓜盗賊（内題：瓜ぬす人）・福の神・悪太郎・鈍根草の六曲を所収。指定辞「ぜあ」を使用せず。

これら、2群のうち、(一)の成城〈甲〉本、(二)の成城〈乙〉本は、和泉流台本であることが明確に推定されるものであり（小林千草1・2・4参照）、(三)の成城〈丙〉本も指定辞「ぜあ」の使用などを含めて和泉流台本として認定することができる（小林千草3参照）。(四)の成城〈丁〉本、(五)の成城〈遠山〉本になると、指定辞「ぜあ」の使用例もなく、曲ごとの詞章分析においても和泉流台本より遠い場合がほとんどで、台本の性格が混沌としている。

そのような資料的状況のなか、本稿では(五)の〈遠山〉本の「瓜ぬす人」（以下、支障のない限り、汎用性のある「瓜盗人」

表記を用いる)が、和泉流主要台本との関連性よりも『続狂言記』との関連性が深く見出せる点を具体的に指摘し、なぜそのような状況に至ったのかを、幕末期狂言興行の実態・各流狂言役者たちの交流の実態をも考慮しつつ、解明していきたい。

タイトルを、あえて、「成城大学図書館蔵〈遠山〉本「瓜盗人」の表現性」とせず、『『続狂言記』をアレンジした幕末台本の表現性』としたのは、従来、『狂言記』シリーズを台本に素人衆が狂言をしたであろうことは予想されても、今回の本稿のように、狂言役者が自分たちの共有の狂言台本として流派を超えて『続狂言記』所収の一曲をアレンジした実例が、報告されていなかったからである。芸能論・狂言台本資料論の上からも、注意を喚起しなかったからである。

なお、(五)成城〈遠山〉本の請求記号は、912・3／KY3／3(W)、登録番号はY093272である。

三 調査に用いた和泉流主要台本

成城〈遠山〉本「瓜盗人」の資料的性格(素性)を把握するために、調査に用いた和泉流主要台本(傍線略称)は、次のようなものである。

i 天理本 狂言六義(寛永～正保〈一六四五前後〉頃書写。天理図書館善本叢書の影印に拠る)

ii 和泉家古本 六義(承応二年〈一六五三〉～元禄六年〈一六九三〉山脇和泉家三代目元信道甫書写。『日本庶民文化史料集成 四』の翻刻に拠る)

iii 波形本 (天明六年〈一七八六〉頃早川幸八書写。小林賢次所持の写真版に

拠る)

iv 雲形本 (文政年間〈一八一八～一八三〇〉頃山脇和泉家七代目元業(もとなり)道鮮書写。小林賢次所持の写真版に拠る)

v 三百番集本 (和泉流三宅派の台本。三宅庄市〈一八二四～一八八五〉手沢本を主とする。富山房百科文庫『狂言三百番集』の翻刻に拠る)

vi 和泉流秘書 (愛知県立大学図書館蔵。小谷成子・野崎典子編『『和泉流秘書』翻刻・解題』一～十二の翻刻に拠る。掲載誌は、一は「愛知県立大学大学院国際文化研究科論集」二であるが、十二は「愛知県立大学日本文化学部論集」三号など、誌名の変更がある)

また、今回、大きな“鍵”を提供することになる『続狂言記』³⁾は、元禄十三年(一七〇〇)刊で、勉誠社刊の影印本に拠る。

なお、大蔵流と鷺流の台本については、幕末期を目安に、それぞれ、大蔵虎寛本・山本東(あずま)本、安政賢通本⁴⁾に目を配っている。

四 場面ごとの、成城〈遠山〉本の状態

成城〈遠山〉本の場面を冒頭より①～⑧段に分け、それぞれのあらすじを簡略に記すと、次の通りである。

場面①: アド(瓜畑主)の名乗りと中入りまで

場面②: シテ(瓜盗人)の名乗りと瓜畑に足を踏み入れるまで

場面③: 瓜畑に入ったシテが、ころびを打って瓜を取るところ

場面④: シテが時の勢いで案山子を打ち倒し、瓜づるもひきむしって退

場するまで

場面[5]: アドの瓜主が再び登場し、瓜盗人が出たことを知り、対策を立てるところ

場面[6]: 瓜盗人が再登場し、立てなおされている案山子を見つめるまで

場面[7]: シテの瓜盗人が、案山子を相手に、“鬼が罪人をせめる”稽古を行なった後、“鬼にせめられる罪人”の稽古を始めようとするまで

場面[8]: シテの瓜盗人が、“鬼にせめられる罪人”の稽古をしている最中に、案山子に成りすましている瓜主が本体を現わして叱責・追い込みするところ

以下、場面ごとに、成城〈遠山〉本と『続狂言記』とを対比させつつ、依拠等の関連性の深さ・浅さ(近さ・遠さ)、つまり、表現上の距離感やそうなった理由などについて指摘していく。本節では全場面への言及があるが、以降の節では、特記事項のない場面への言及はない。

場面[1]に関して

成城〈遠山〉本は、〈雲形本〉のセリフの伝承を基盤に、『続狂言記』の具体的なセリフ運びに拠りつつ、セリフ量の簡略化をねらったものと推測される。

場面[2]に関して

成城〈遠山〉本は、『続狂言記』のセリフにほとんど全てを依拠している。

和泉流の最も古い台本である天理本に「身上ならぬよしヲ云テ・此中・夜〜・人乃瓜をぬすんで・しやうばいにして・とせいをおくる・面目もなけれ共・又今夜もまいる」(下42オ)とあるセリフは、和泉家古本でもほぼ同一セリフであ

る。〈波形本〉では、のちの〈雲形本〉や和泉流秘書にあるような幾分あたりをやわらかくした設定に変更したものの、幕末の三百番集本では盗んだ瓜を売ろうとする点など古い台本に回帰している。これらと泉流の歴史的(伝承的)流れから離れて、成城〈遠山〉本は、あくまでもシテの出来心として瓜を盗んでしまったと設定して以後のドラマ展開を求め、同じ物語展開をする『続狂言記』のセリフを積極的に採用していったものと考えられる。

場面[3]に関して

成城〈遠山〉本は、『続狂言記』のセリフにかなりの程度依拠している。

〈遠山〉本が、和泉流の他本や、大蔵流・鷺流などのように、暗闇で瓜を取るためにころびを打つ時の掛け声「えい〜」あるいは「えい〜やつとな」「いやえい」を入れていないのは、和泉流・大蔵流・鷺流からも均質な“遠さ”を保とうとする〈遠山〉本の“立ち位置”を表明する工夫ではなかったか、と見られる。

場面[4]に関して

成城〈遠山〉本と『続狂言記』の似よりは高いが、順不セリフが数ヶ所生じていたり、互いの独自辞句・独自本文が存在するので、総合的な似より度は●●○ぐらいであろうか。成城〈遠山〉本は、『続狂言記』に多くを依拠しつつ、今までになく自由にセリフ順の組みかえをし、和泉流狂言役者として記憶されていたセリフも一つ二つまじえつつ、台本としての充実をはかっている。

〈遠山〉本の冒頭に出る「ハアこゆるされませ〜」は、和泉流〈雲形本〉(一八一八〜三〇年頃和泉元業書写)の「ハア御免されませ〜」(十五39ウ)と

同一辞句である。のちの和泉流秘書では「ハア」が「アゝ」になっているが、〈雲形本〉のように「ハア」とする台本があったとしたら、そのようなセリフ回しが記憶にある和泉流の狂言役者が『続狂言記』をもとに新たな台本創作にかかわり、成城〈遠山〉本が出来た可能性を示唆する。場面[5]に関して

成城〈遠山〉本は、「かかし」⇔「人形／かがせ」⁵⁾の相異のほか、二ヶ所ほどセリフの順不を設け、あとは『続狂言記』にほとんどを依拠している。また、「ほぞ落ち」の語を使うことによって、三流から均等に“遠い”立ち位置を確保することに成功している。場面[6]に関して

成城〈遠山〉本は、和泉流〈雲形本〉の本文に基盤を有しつつ、『続狂言記』の本文に多くを依拠し、また、大蔵流のセリフの息づかいも参考にしつつ、台本の充実をはかっている。

傍線部の具体例として、〈遠山〉本の「今さらなりますまいとも申されず扱／＼めいわくな事なから」という困惑のことばが挙げられる。このセリフは、〈雲形本〉・和泉流秘書とも共通し、成城〈遠山〉本台本作成者の基盤として和泉流台本の素養があったことは否定できない。特に、場面[6]では〈雲形本〉のセリフの流れを意識した事例が多い。

一方、二重線部の事例は、〈遠山〉本に新たに補われた「夜前」「明日」など具体的にさし示す語や「アゝ」という感動詞など、臨場感のある語のつけ足しであり、これを見ると、大蔵流のセリフの息づかいも参考にされたことが推定される。

場面[7]に関して

成城〈遠山〉本は、和泉流〈雲形本〉の

基盤を有しつつ、『続狂言記』の本文にきわめて多くを依拠し、また、大蔵流のセリフの息づかいも参考にしつつ、台本の充実をはかっていると言える。

場面[8]に関して

冒頭の「あらかなしや……杖てちやうと打」や、末尾の「ゆけどゆかれぬ……杖をちやうとうつ」は、「謡」仕立ての詞章であり、伝承性の高い部分であるので、各流似よりは高いのであるが、

①是ほど⇔只今 〈遠山〉本・続狂言記・大蔵流虎寛本⇔〈雲形本〉・和泉流秘書

②とまれんば⇔とまれば⇔とどまれんば 〈遠山〉本・続狂言記・〈雲形本〉⇔大蔵虎寛本⇔和泉流秘書

③とまれんば⇔とどまれんば⇔とまれば 〈遠山〉本・〈雲形本〉⇔続狂言記・和泉流秘書⇔大蔵虎寛本

のような対比が見られる。①の「是ほど」に関する〈遠山〉本・続狂言記・大蔵虎寛本の一致は、〈雲形本〉(のちの、和泉流秘書も)に代表される和泉流の詞章の一部を採らず、大蔵流台本詞章を採ったことになり、和泉流からの“独立性”が示されている。〈雲形本〉(のちの、和泉流秘書も)と〈遠山〉本との似より度は、●●○あたりを見込めるものの、ここがワンポイントで相異なることは、“知る者”にとっては大きな相異となる。また、大蔵虎寛本と〈遠山〉本との似より度は●●○とやや低めであるにかかわらず、ここが一致することは、“知る者”にとって、“大蔵流台本か”と思わせる効果をもたらす。さらに驚流でも、

④驚流台本……あら悲しや、これ程参り候に、さのみな御責め候ひそ行か

—5—

であるように、狂言会話における“間合い”は、感動詞（間投詞）や副詞により、生き生きと保たれる。逆に言えば、『続狂言記』を“読み物”として享受するかぎり、これらの添加のされない状態であっても特に支障は生じなかったわけである。

六 もともと『続狂言記』にあった語彙・表現のうち、和泉流・大蔵流・鶯流にないものを積極的に採用したもの

もともと『続狂言記』にあった語彙・表現のうち、和泉流・大蔵流・鶯流にないものを積極的に採用したものについて見ていくと、当該例は、場面①・③・⑤・⑦で生じている。

場面①に関して

- ⑭今日もほそ落かあらはとつて参らふと存る（〈遠山〉本）⇔今日ハはたけへ見舞て。ほぞおちのいたしたを。少取て参らふと存る。（『続狂言記』）

場面③に関して

- ⑮ハイつぶれた 扱もよいにほひしや
⇔ひとつつぶれたハと云（原文はト書き割り注） 扱も／＼よにおひじや。

場面⑤に関して

- ⑯まだほそ落かいたさなんだ 今日ハ大方ほそ落かいたてこさろうと存る⇔まだほぞおちがいたさなんだ。けふハ大かた。ほぞおちがござらふ。
⑰内の者をつかわしてハ瓜をぬすミ取るによつて獨り某か見舞ふ事てこさる⇔内の者をやれば。瓜を盗るるによつて。某の毎日参らねばならぬ。

場面①と⑤の瓜のほそ落ちの件、場面③の瓜のつぶれる件、場面⑤の「内の者が瓜を盗み取る（をる）」件は、〈雲形本〉・

和泉流秘書、そしてこれらに先立つ〈波形本〉にも、さらに遡る天理本・和泉家古本にも、ない。また、大蔵流の虎寛本、鶯流の安政賢通本にもない。ということは、もともと『続狂言記』にあった語彙・表現のうち、和泉流・大蔵流・鶯流にないものを〈遠山〉本が積極的に採用したものということになる。

場面⑦に関して

- ⑱〈遠山〉本・『続狂言記』……いつも盆になれば若ひ衆かおとりをおとらせらるるが當年は中おとりに

- ⑲〈雲形本〉・和泉流秘書……某は當年祇園會の頭にあたつた いづれもわかい衆のおせあるは

- ⑳大蔵虎寛本……近日村の祭禮で御さるが

場面⑦は、「シテの瓜盗人が、案山子を相手に、“鬼が罪人をせめる”稽古を行なった後、“鬼にせめられる罪人”の稽古を始めようとするまで」を描くが、シテがなぜこのような稽古をしてみようと思いついたか、その発想の原点が⑱～㉑なのである。その原点が、三本三様であるところが、問題である。〈遠山〉本は、和泉流役者が中心となり、大蔵流役者の協力を得ているものと推測されるが、和泉流の「祇園會」をとらず、大蔵流の「村の祭禮」をとらず、『続狂言記』にある「盆」をとったところに、〈遠山〉本の和泉流からも大蔵流からも独立した“姿”（姿勢）を認めることができるし、祇園會のない町や「村の祭禮」が大大的ではない村々の観客にも受け入れやすい設定をしたものと納得できる。盆の行事——盆踊りなどの余興は、近世では最もポピュラーなものであったと想定されるからである。

盆は、瓜がとれ瓜を味わう季節でもある。各流の底辺に位置する役者たちが、村々に出向いて、盆の余興として狂言「瓜盗人」を演ずる可能性も少なからずあったはずである。このような、狂言が芸能として受容される時期・場所を充分考慮した上でのセリフ選びと見なされる。成城〈遠山〉本の台本としての実利性が強く感じられる事例である。

七 和泉流以外の詞章のとりたてについて

〈遠山〉本の場面①における

②誠に此邊の方はいつれも瓜をつくられてこさるか何か瓜ほとよふ出来たハないと人々のほめるものて御座る (16才)

の傍線部は、和泉流・大蔵流に同趣表現がなく、鷺流の台本である安政賢通本の

②世間に田畑を数多持った衆もござれとも、中にも某の畑のやうに、毎年出来るは無いとあつて、皆の賞め物に致さる事てござる (下25頁)

に該当する。

また、〈遠山〉本②③「かつきめのかすまいそ」⇔『続狂言記』②④「がつきめ。やるまいぞ」という対比がある。これは、〈遠山〉本が、〈雲形本〉(のちの、和泉流秘書)や大蔵虎寛本も同じセリフである②④を採らず、鷺流の安政賢通本にある②⑤「がつきめ逃すまいぞ」(下29頁)をわざと生かしている事例であり、鷺流の面目も立つようにした工夫ではないかと推定する。

八 あえて『続狂言記』の用語を採らなかった事例

ここまでの考察を通して、成城〈遠山〉

本が、陰に陽に『続狂言記』を意識したところで作成されていることを知ったが、本節では、あえて『続狂言記』の用語を採らなかった事例を列挙する。

場面①に関して

②⑥〈遠山〉本「百姓てこさる」⇔『続狂言記』「耕作人でござる。」⇔〈波形本〉・〈雲形本〉・和泉流秘書「此辺りの者て御座る」⇔大蔵虎寛本・山本東本「耕作人で御座る」

〈遠山〉本が、②⑥で『続狂言記』の「耕作人」を採らなかったのは、大蔵流寄りの語を避けたためと推測される。

②⑦〈遠山〉本「案山子(かゞし)」⇔『続狂言記』「人形」

〈遠山〉本の「案山子(かゞし)」は、〈波形本〉・〈雲形本〉・和泉流秘書など和泉流の伝承に従っている。大蔵虎寛本・鷺流安政賢通本も「案山子(かゞし)」である。なお、〈遠山〉本は、一貫して、「人形」の語を用いない。それは、のちの場面⑤・⑥・⑦でも、同様である。

場面②に関して

②⑧〈遠山〉本「今日所用有て」⇔『続狂言記』「今日用所ござつて」

中世資料には、時折「用所」なる語が出てくるが、幕末期には古めかしい語彙と意識されたか、〈遠山〉本は、より一般的な「所用」を用いている⁶⁾。

場面④に関して

『続狂言記』の②⑨「物を仰ら(れ)ねば。何共めいわくでござる」のセリフが〈遠山〉本にない背景として、大蔵虎寛本に同じセリフが「物を仰られいでは迷惑に御座る」のようにあったので、その類似性をここでは避けた結果と考えられる。

このような、『続狂言記』を母胎に、和泉

流、大蔵流、(可能性としては鷺流も)の会話をどの程度組み入れるかについては、各流儀に属する底辺役者たちの合議によって成されたものを推定される。

場面[5]に関して

場面[1]同様、〈遠山〉本「案山子(かゞし)」⇔『続狂言記』「人形」

の対比のほか、

③〇〈遠山〉本「案山子(かゞし)」⇔『続狂言記』「かゞせ」

の対比がある。

なお、〈波形本〉・〈雲形本〉・和泉流秘書・三百番集本にも、大蔵虎寛本にも「かゞせ」の例は出ない。

場面[6]に関して

③かゞし⇔人形(2回)

かゞし⇔かがせ(1回)

欠 ⇔人形(ト書き中 1回)

の対比が認められる。〈遠山〉本の「人形」「かがせ」を使わないという選択は、セリフでは酷似している『続狂言記』から一瞬にして独立させる効果を發揮している。

場面[7]に関して

③かゞし⇔人形(2回)

欠 ⇔人形(1回)

③の対比は、『続狂言記』における「案山子」を「人形」と表現する傾向性を濃厚に示している。それに対して、成城〈遠山〉本は、「かがし」で一貫性を出している。

九 おわりに

以上の考察をまとめると、

☆成城〈遠山〉本「瓜ぬす人」は、『続狂言記』所収「瓜盗人」の詞章を枢軸にすえ、原則としてその詞章に基づくことを大前提とし、和泉流・大蔵流・鷺流の底辺(周辺)に位置する

狂言役者によって合議の上で若干の改変を受けたものである。

その改変の大きさや、どの流派のものを生かすかは場面ごとに相異があるものの(そこにこそ、三流の“譲り合い”が推測される)、合議に参加した者の人数的なもの、あるいは合議を主導した者の所属によったものか、和泉流の色合いを背後に認めざるをえない。

ということになる。和泉流の色合いが人的にも台本基底部分にも存在するからこそ、和泉流台本として確定的な成城〈甲〉本・成城〈乙〉本などととも一括されて伝えられて来たと言えよう。

幕末期のおそらく名古屋周辺⁷⁾から京都を含めて関西圏の、和泉流・大蔵流・鷺流に属する底辺役者たち、あるいは、その人々を師匠として、町や村の催し物で狂言を時おり演じていた素人衆の台本として、誰もが買って持つことのできる『続狂言記』所収の「瓜盗人」を根幹に作成されたのが、〈遠山〉本「瓜ぬす人」であったのである。

最後に、こうして出来上がった〈遠山〉本「瓜ぬす人」のセリフ構成がきわめて優れたものであった事例を示しておきたい。

〈遠山〉本「瓜ぬす人」は、場面[6][7]で、独自本文の「先あたりに人もない」「あたりに人もなし」を有していた。これは、のちのち、瓜盗人が“鬼が人をせめる”稽古・“鬼にせめられる罪人”の稽古をやってみようとする心理的な動機となっている。つまり、「瓜盗人」という狂言ドラマの“序破急”の“急の急”において、案山子に成りすました瓜主がシテ盗人につぶてを打つという場に至って、

③③〈遠山〉本……あたりに人もないが
ふしきな事じや

③④『続狂言記』……あたりに人ハない
が。ふしきなことじや。

③⑤〈雲形本〉……あたりに人影は見え
ず。はて合点のゆかぬ。

③⑥和泉流秘書……辺りに人かげも見へ
ぬ。合点の行ぬ事ちや

③⑦三百番集本……案山子の後(うしろ)
に人も居ず。

③⑧大蔵流虎寛本……はて合点の行ぬ。
人音もせぬが

という、各流同趣セリフを有するという
確信のもとに、伏線として「先あたりに
人もない」「あたりに人もなし」というセ
リフを場面⑥⑦に張ったのである。

場面⑥⑦で“この瓜畑には自分以外、
誰もいない”という前提を、強烈にセリ
フとして発しておくことで、最終場面
⑧につながる“統一性”を〈遠山〉本はは
かっていたのである。これは、全く近代文
学的な小説手法でもあり、下手をすれば
モザイク構想で分散しかねない三流合作
の「瓜盗人」を見事な統一体として産み出
す(プロデュースする)工夫でもあった。

一見、どの台本にも似つかぬセリフを
もつものの、よく読みこめば、宗家や有
力弟子筋の書写本と変わらぬ質を持つ
台本が、幕末期の狂言台本には意外に存
在することを成城〈遠山〉本「瓜ぬす人」
は我々に伝えている。近代文学黎明期を
支えた文学力の一端は、市井の狂言役者
集団にも存在し、江戸出版文化の所産で
あった『続狂言記』所収の「瓜盗人」を味
のある人間洞察のドラマに再生させるこ
とができたのである。

注

1) 大蔵流・和泉流・鷺流をさす。この
うち、鷺流は、江戸幕府の保護を厚く
受けていたため幕府瓦解とともに衰退
して、現在では、民俗伝承芸能として
生きるのみである。

2) 指定辞「ぜあ」とは、「是はいかな事。
新発意か只ひとりぜあ。(略) さて〱
かしましい奴ぜあ。(略) 何せあ大ぜい
道者かある」(成城〈甲〉本「薩摩守」1
オ～ウ)のごときもので、指定辞「ぢや」
と機能的にはほとんど変わらず、口で
発され、耳で聞いた時の音の相異を文
字に反映させたものと考えている。詳
細は、小林千草1・4参照。

3) 北原保雄・小林賢次(一九八五・二)
『続狂言記の研究』における、北原保雄
氏解説四一二～四一三頁には、池田廣
司(一九五四・八)を引用し、

○「『続狂言記』に収められている五十
番が、他の流派の狂言とどういう関
係にあるかということについては
(略) 名乗りなど多少せりふに異同
はあるが、『三百番集本』に概して類
似する曲／「瓜盗人」

とある。また、北原保雄氏解説四一五
頁には、同じく、池田廣司(一九五四・
八)を引用され、

○「『続狂言記』『狂言記拾遺』になると、
(略) 京流も南都瀬川流もついに勢力
を持つに至らなかったことなど考え合
わせると、群小諸派から遠ざかり、刪
定或いは固定せる大蔵流を多分に反映
した台本によったものと思われる

とある。

4) それぞれの底本は、岩波文庫『能狂
言』・岩波日本古典文学大系『狂言集』、

朝日古典全書『狂言集』である。

- 5)「かがし」については、その語源や同義語に広く触れたものとして、鈴木博氏の一連の論考がある。それらは、鈴木博一九八四・一一『室町時代語論考』（清文堂出版）に「カガシ」の語源」として3～30頁に収録されている。
- 6)「用所」については、福島邦道一九七七・二「用所：キリシタンのことば」（『実践国文学』11号）が詳しい。
- 7)「名古屋周辺」という限定については、（ア）「ぜあ」を多く含む和泉流台本である〈雲形本〉を文政年間〈一八一八～一八三〇〉頃書写した山脇和泉家七代目元業（もとなり）道鮮の活動本拠地が名古屋であったこと（イ）指定辞「ぜあ」は、「であ」「でや」、また終助詞「ぜ」など関連づけることによって、国語史的に「ぢゃ」とは別にその存在を想定することができが、名古屋地方には近世後期から幕末期に「でや」の語が使われていたこと
- によって、導いたものである。なお、名古屋地方における終助詞「でや」については、湯浅彩央二〇一七・三「地方洒落本のなかの江戸語——尾張洒落本を例に——」（『湘南文学』第五二号）が参考となる。

参考文献

- 小林千草1（二〇一六・三）「成城〈甲〉本における「ぜあ」——その実態と狂言台本としての性格」（『東海大学紀要文学部』第一〇四輯）
- 小林千草2（二〇一八・三）「成城〈乙〉本「縄ない抜書」の資料的性格と言語」（『近

代語研究』第二〇集 武蔵野書院刊）

- 小林千草3（二〇一九・三）「成城〈乙〉〈丙〉〈丁〉本所収「地蔵舞」の性格と用語」（『湘南文学』第五四集）
- 小林千草4（二〇一九・七）『幕末期狂言台本の総合的研究 和泉流台本編1』（清文堂出版）
- 小林千草5（二〇一九・九）「成城〈甲〉本「簞屑」の性格・用語と『和泉流秘書』（『近代語研究』第二一集）
- 小林千草6（二〇一六・一〇）『幕末期狂言台本の総合的研究 大蔵流台本編』（清文堂出版）
- 小林千草7（二〇一八・一）『幕末期狂言台本の総合的研究 鷺流台本編』（清文堂出版）
- 小林賢次1（二〇〇八・二）『狂言台本とその言語事象の研究』（ひつじ研究叢書第61 ひつじ書房刊 「ぜあ」に触れた論考初出は、二〇〇四年三月「和泉流雲形本『狂言六議』の本文の性格について——筆録時期と言語事象——」（東京都立大学「人文学報」第三五一号）である）
- 池田廣司（一九五四・八）「版本狂言記の台本について」（『国語』のち、風間書房刊『古狂言台本の発達に關しての書誌的研究』に所収）
- 北原保雄・小林賢次2（一九八五・二）『続狂言記の研究』（影印・翻刻・索引・解説〔その第四章「言語資料としての『続狂言記』』は、小林賢次の執筆になる〕）

付記：投稿後、査読委員諸氏より有益なご助言を受けた。ここに厚く感謝申し上げます。（元東海大学教授）